

スターチスの常温育苗に適する品種 ～育苗コストを約30%縮減～

1. はじめに

スターチス・シヌアータ（以下、スターチス）は、必要量の低温に遭遇すると抽だいし開花に到りますが、低温遭遇後に高温下におかれると脱春化し開花が遅延するといわれています。このため、夏季（7、8月頃）に育苗する本県では、脱春化を回避させるために冷房育苗を行っていますが、設備費、電気料金等で育苗コストが増大しています。

そこで、当センターでは冷房育苗期間を短縮し、スターチスの需要期（年内～春の彼岸）の切り花本数を従来通り確保する、鉢上げ後の常温下での育苗（以下、常温育苗）技術の開発に取り組みました。この方法では、プラグ苗を鉢上げした後常温で育苗するため、冷房育苗施設が無くともプラグ苗を購入すれば自家育苗が可能になります。

これまでに‘紀州ファインバイオレット’では、常温育苗の育苗資材は固化培地（培養土を固めたもので、培地が露出し、ポリポットが不要）が有望であることを明らかにしています（前号参照）。ここでは、本県主要品種における、固化培地（図1）を利用した常温育苗の適応性を検証した結果を紹介します。

2. 試験方法

供試材料：‘紀州ファインバイオレット’、‘紀州パープル’、
‘サンデーバイオレット’、‘紀州ファインラベンダー’、
‘フェアリーピンク’、‘紀州ファインイエロー’、
‘紀州ファインパール’の200穴または288穴購入プラグ苗

育苗条件：期間；21日（遮光率70%（サンサンカーテン））

資材：常温育苗；固化培地（すいすいポット、垣本商事(株)製）、容積；約120ml

冷房育苗；7.5cmポリポット（(株)東海化成製）、セル培土TM-2、容積；約220ml

気温：常温育苗；なりゆき気温、冷房育苗；昼温（6:00～20:00）25℃/夜温15℃

かん水：常温育苗；ミスト散水（2～3回/日、15分/回）

冷房育苗；頭上かん水（1回/日）

耕種概要：定植；2017年8月29日、株間35cm、条間40cm、2条千鳥植え、最低気温；2℃
温室（屋根部：エフクリーン被覆、サイド・ツマ部：ガラス）栽培



図1 供試固化培地
（すいすいポット）

3. 試験結果

(1) コスト試算

固化培地で常温育苗すると7.5cmポリポットより資材費がかかりますが、空調設備や電気代が不要で鉢上げ作業を省力化できるため、冷房育苗するより育苗コストを30%程度、縮減できます（表1）。

（注）今回供試した固化培地は、培養土の充填が不要で、プラグ苗の大きさに応じた植え穴が空いているため、鉢上げの作業性が良好です。しかし、培養土が乾きやすく、肥料成分を含みませんので、こまめなかん水と液肥の施用が必要となります。

表1 育苗方法別の1株あたり育苗コスト試算

(円)

項目	育苗方法		備考
	冷房育苗	常温育苗	
	7.5cm ポリポット	固化培地	
施設設備導入費	29.2	7.5	1年あたり（パイプハウス、空調設備）
育苗費			
育苗資材	1.5	26.0	
育苗培土	9.1	—	
電気代	8.3	—	200V、定格電流21.8A、契約電力8Kw、28日間育苗の場合
労賃 (内訳)	7.1	5.0	1時間あたり1,250円で算出
鉢上げ	5.6	3.1	鉢上げ準備（培養土の充填等）を含む
液肥施用	0.9	1.3	7.5cmポリポット2回、固化資材3回
防除	0.6	0.6	2回
合計	55.2	38.5	

注1：育苗施設100㎡、育苗本数12,000本、育苗期間（7.5cmポリポット28日、固化資材21日）で算出

注2：試算はあくまでも一例であり、情勢により変動する場合があります。

(2) 切り花本数

需要期（3月まで）の切り花本数は、‘紀州ファインバイオレット’、‘サンデーバイオレット’、‘紀州ファインラベンダー’、‘紀州ファインイエロー’、‘紀州ファインパール’では、冷房育苗と比較して、常温育苗は同程度あるいは増加傾向を示しました（図2）。しかし、‘紀州パープル’と‘フェアリーピンク’は、常温育苗における需要期（3月まで）の切り花本数が冷房育苗より少なく、常温育苗の適応性が低いと考えられました（図2）。‘紀州ファインバイオレット’および‘紀州ファインラベンダー’を除いた5品種では、年内の切り花本数が減少する傾向が見られました。特に‘フェアリーピンク’、‘紀州ファインパール’では、この傾向が顕著でした（図2）。

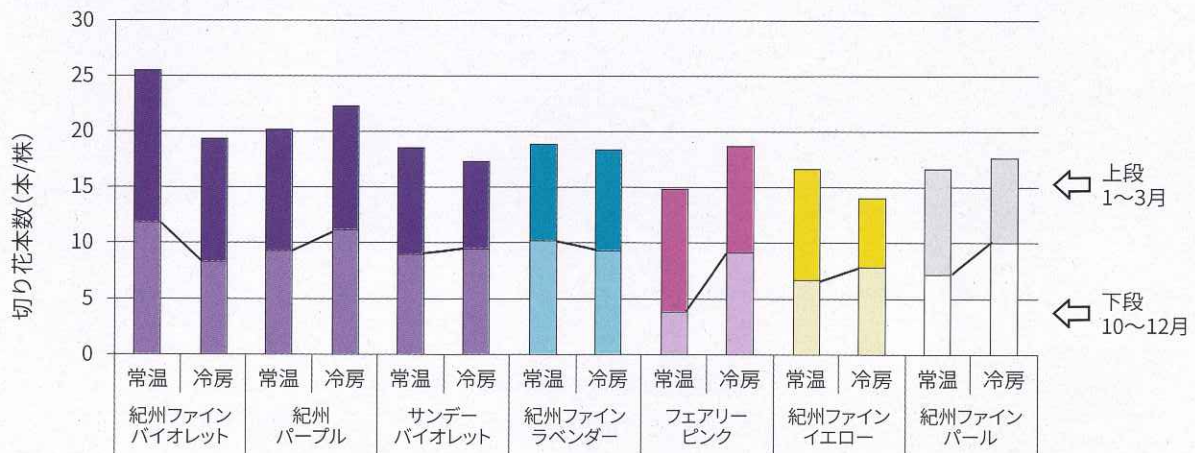


図2 育苗方法と切り花本数

4. まとめ

‘紀州パープル’と‘フェアリーピンク’は常温育苗の適応性が低く、‘紀州ファインバイオレット’、‘サンデーバイオレット’、‘紀州ファインラベンダー’、‘紀州ファインイエロー’、‘紀州ファインパール’では切り花本数を確保することができ、固化培地を用いた常温育苗の適応性は高いと考えられました。固化培地を用いた常温育苗では、品種間で差異が認められるものの、需要期の切り花本数を確保できるとともに、育苗コストを約30%縮減できることから新たな育苗方法として有望な方法だと考えられます。

(園芸部 金川 真実)